

九州を歩こう！

「歩く旅」がつくる持続可能な地域と観光

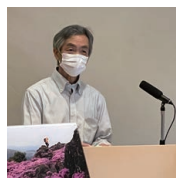
主催：環境省九州地方環境事務所 共催：九州自然歩道フォーラム 協力：NPO 法人みちのくトレイルクラブ



2021 年 5 月 13 日（木）、「九州自然歩道 40 周年記念シンポジウム 九州を歩こう！「歩く旅」がつくる持続可能な地域と観光」を開催しました。シンポジウムは、新型コロナウイルス感染症対策のため、阿蘇草原保全活動センターからライブ配信、当日は 130 名を超える方々にご視聴いただきました。

01 開会あいさつ

シンポジウムの初めに、主催の環境省九州地方事務所所長の岡本光之氏からご挨拶。



近年、フットパスやガストロノミーウォーキングなどさまざまなバリエーションの歩く観光が、地域によって育まれてきています。SDGs を踏まえた、持続可能な観光や新型コロナウイルスとの共存が求められる現代、「歩く旅」に別の角度の光が当たり始めてきました。本シンポジウムを契機に、歩くことの魅力を再認識し、今後の取り組みに向けた機運の醸成が図られることを期待しております。

02 加藤則芳氏記念映像上映

日本のロングトレイルの第一人者であり、九州自然歩道の立ち上げにもご尽力いただいた、故・加藤則芳氏の記念映像を上映しました。

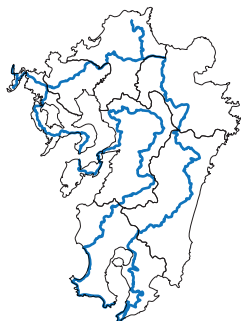
私の聖地は、ジョン・ミューア・トレイル（総距離約 340 km）です。1000 m 級の山々を貫くトレイルですが、一切ピークを登らず、ピークを眺めながら、一步一步を楽しむトレイルです。その楽しみ方を学び、日本にトレースしたいと思いました。日本のトレイルはほぼピークを目指しています。これはアメリカとの徹底的な違いです。そうではない楽しみ方があるんです。長距離トレイルの魅力は、自然や風景、歩くバックパッカー同士の交流がありますが、それ以上に“心の通い合い”があります。生半可ではない距離を歩く間に、バックパッカー同士の心の通い合いがどんどん深まっています。地域の人たちとの心の通い合いも生まれます。地域の人たちが地元を非常に誇りに思い、歩く人たちも地域の方々をリスペクトしていくのです。



03 長距離自然歩道の紹介

次の2つのロングトレイルに関わる民間団体から最新事情や活動内容を紹介いただきました。

『九州自然歩道』



1980 年開通

九州 7 県 / 総延長約 3000 km

九州自然歩道は、山の中はもちろん里山や小さな路地など、多様な道を通っています。おすすめは国立公園で、霧島連山の高千穂峰から見られる火山地帯や、天草最高峰の倉岳からの海と島々の眺望など美しい自然の風景をたくさん楽しめます。ただ開通から 40 年が経過し、今後どう持続させていくかが問題になっています。加藤則芳氏が九州を訪れた際に「整備が必要ではあるが、日本を代表する自然と歴史文化をつなぐ魅力にあふれたロングトレイルになるだろう」と言われました。フォーラムでは、環境省や各県等の自治体と民間の力を活用した維持管理・運用についてミーティングを重ねたり、PR のためにトレッキングイベントを開催したりしています。今後も更なる発展に向け取り組みを進めて行きます。

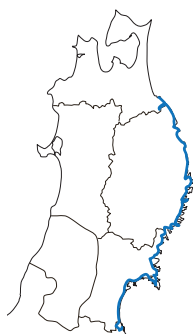


【紹介者】福島 優 氏
九州自然歩道フォーラム
事務局長

- 1 高千穂峰直下から望むお鉢
- 2 フォーラムミーティング
- 3 トレッキングイベント



『みちのく潮風トレイル』

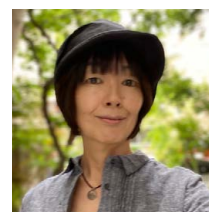


2019 年開通

青森、岩手、宮城、福島 4 県

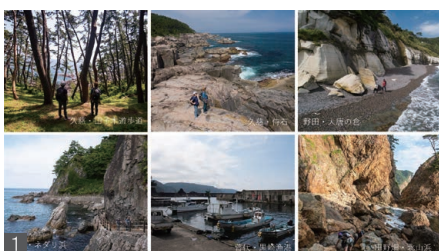
/ 総延長約 1000 km

本トレイルは、2011 年の東日本大震災の復興プロジェクトとして立ち上がりました。アドベンチャラスなコースやジオパーク要素の高い場所、地域の伝統文化を伝える施設などを通ります。震災当時の話を聞かせてくれる地域の方もいます。ハイカーは、風景も素晴らしかったが、人との出会いが何よりも心に残っていると感想を聞かせてくれます。そして東北のファンになり、繰り返し訪れてくれます。私は、トレイルは誰にも参加できる地域計画であると思っています。1 人 1 人の声掛けが交流人口、関係人口の増加につながり、移住促進につながるからです。地域に誇りを持てるようにもなります。それが持続可能な地域づくりや観光につながると思っています。



【紹介者】相澤 久美 氏
NPO 法人
みちのくトレイルクラブ
常務理事・事務局長

- 1 海沿いの風景
- 2 まちなかの風景
- 3 ハイカーと地域との交流



その他、地域の取り組み
・壊れなくなった、しいけ生産組合の建物をハイカー向けの施設にすべくがんばっている地元の方々。掃除をしている館中にたまたまハイカーが通りかかり、話を聞いた。

04 基調講演

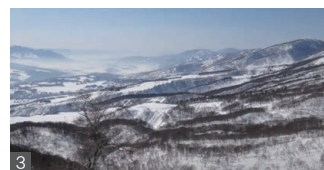
「歩く旅」を生業とされており、九州とゆかりの深い次のお二方に基調講演をしていただきました。



ポール・クリスティ氏
WALK JAPAN CEO / The Japan Travel Company (株)
代表取締役社長

英国出身、大分県杵築市在住。旅行会社 WALK JAPAN の事業を企画・展開し、文化、自然、農業、暮らしなどのテーマ性豊かな地方の魅力に特化した「知られざる日本」を巡るツアーを通して、「ありのままの日本」を紹介。地元、国東半島では、農業×文化×観光を活用した地域振興に取り組む。

最近、旅行において「地元の方と交流したい」「学びたい」「チャレンジしながら体を動かしたい」など知的好奇心からくる需要が高まっているように感じます。弊社のツアーは、平均8～10日間かけて、少人数で地域を歩いていきます。少人数であるため、大きな団体では厳しい場所にも行くことができ、地域社会や日常生活に忍び込むことができます。私は、「歩く」ということは、人間にふさわしい行動であると思っています。歩くことで周りの環境が体に取り込まれ、五感がよりよく機能し、研ぎ澄まされていきます。参加者は歩く中で、日本の歴史や自然、文化に触れ、日本という国を体感していきます。「期待していたがそれ以上に良かった」「日本に戻りたい」と皆さん言うてくださいます。また、本社のある大分県の国東半島で、山林の整備や景観保全などの地域振興のお手伝いしています。日本の田舎の恵で生業をさせてもらっているの、日本の自然を大事にしなければならないという責任が我々にはあると思っています。



1 中山道 2 瀬戸内
3 雪国 4 森林整備



春山 慶彦氏
株式会社ヤマップ
代表取締役社長

1980年生まれ、福岡県春日市出身。同志社大学卒業、アラスカ大学中退。ユーラシア旅行社『風の旅人』編集部勤務後、2010年帰国。2013年にITやスマートフォンを活用して、日本の自然・風土の豊かさを再発見する“仕組み”をつくりたいとYAMAP（ヤマップ）をリリース。2020年3月時点、アプリ累計ダウンロード数230万を突破。

私が伝えたいことは「歩く観光が、地域、風景を豊にする」ということです。日本ならではの歩く観光をこれからどうつくっていくのか、あるいは蘇らせていくのが、地域づくりや風景づくりにとって非常に重要であると思います。皆さんに質問ですが「九州の島の可能性をどう表現しますか」。歩くことや風景を考えると、自分たちが暮らしている町の環境をきちんととらえていないと観光はつくれないと思っています。それをどう体感し、どう伝えていくかを考えるときの1つの手段が「歩く」だと思っています。歩くことは、感覚や感性を大事にする行為であると思っています、それが重要であると考えています。歩くという行為を積み重ねていくと風景と自分がつながるかのような瞬間があります。ゆっくりしたスピードであるから、いろいろ発見があります。しかし、気持ちよく歩ける道は非常に少ないと感じています。

歩くという動詞から、道や風景、町、生活をつくり直すことができれば、おもしろい地域や楽しみがある場所をつくることができると考えています。観光につなげるために、道を使うというのが今までのメインでしたが、逆だと思っています。風景をつくって生活を豊かにし、それを道につなげ、そして観光につなげていくというのが主流であると思っています。

私は、歩く観光を主体に考えると、主語は「地域の人」であると考えています。自分たちがどういう風景をつくりたいかをそれぞれの地域で考えていかなければならないと思っています。なぜなら、風景というのは、私たちそのものであって、過去の人たち、これから生きる人たちがそのものであると思っていますからです。その感覚を歩くという行為を通して、もう一回実感し、実際に風景を良くしていけるとおもしろいのではないかと思います。

05 トークセッション

環境省九州地方事務所の松永氏と共に、全国各地で様々な地域づくりのプロデュースに携わっているブンボ株式会社代表の江副氏に進行へ加わっていただき、トークセッションを行いました。講演いただいたポール氏、福島氏に加え、九州各地で「歩く」を実践されている濱田氏、成崎氏、木村氏の3方にご登壇いただきました。

江副氏：皆さん基調講演いかがでしたでしょうか？

濱田氏：風景は地域の一つの営みを表すということが印象深かったですね。いかに風景をつくっていくか、取り組んでいかないといけないと思いました。

福島氏：ポールさんの“一緒に地元社会に忍び込む”という言葉は、ずしっときました。地域の特色を楽しめることが、歩く旅の魅力であることを改めて実感しました。

木村氏：一番印象に残ったのは、春山さんの「九州の島の可能性をどう表現しますか」ということです。九州全体の魅力を我々の魅力として紹介していけるように、連携していければと思いました。



江副氏：自分の日常生活の風景をきれいにしておけば、その地域はすごく魅力的になるというところで、それを突破するきっかけが「歩く」という行為なのではないかと感じましたが、みなさんその辺いかがですか？

濱田氏：歩きに来る方が自分の地域を選んで訪れてくれることを

地域の皆さんが感じ、声かけや、地域をきれいにしていくことにつながっています。そういう意識が芽生えてくるのが、「歩く」ことの効果だと感じています。

松永氏：ポールさんへ質問です。ツアーにストーリー性を持たせると仰っていましたが、具体的にどのようなストーリー性をもたしているのですか？

クリスティ氏：一つのストーリーの形が、日本を知ることです。彼らが持っている日本の印象と異なる日本を伝えていくと、ある種のストーリーが生まれてきます。

江副氏：ポールさんのお話を聞いて体験が非常にきめ細かいと感じました。歩くことで五感をすべて使い、非常に多くの情報が細かく感じられ、それが結果的に体験の質を上げているのではと想像しました。

江副氏：将来にむかって、九州自然歩道の今後の夢や希望など何か描いているものはありますか？

木村氏：九州自然歩道と連携しながら、ローカル線やイーバイク、カヤックなども取り入れ、歩くというシンプルなものを軸にそこから先のバリエーションを考え、歩く人たちがさまざまな楽しみ方をできればと思っています。

成崎氏：道の荒廃が進んでいるというのが当面の課題です。地域の方々の協力なくしては、整備することは難しいです。「うちには、なにもねえからね」と言われる地域の方がとても多いです。そういった地域の魅力に気がつかせてあげることが、いい道づくりにつながるのではないのかと思っています。地域の人のつながりを大切に、やれる人が地域に入って、整備もツアーとしてするなど仕掛けていけたらと思っています。

福島氏：開通から40年経ち、利便性に合わせて車道化されたところもあり、歩くことに向かない道の箇所もあるため、2030年までに、次の時代に合ったコースの見直しをしたいと思います。維持管理は現状、環境省や各県にしていますが、8団体ですと連携が難しく、一方で各地域の方々に活動していただかないとできない面もあります。今後も持続可能なナショナルロングトレイルのため、さまざまなチャレンジをしていけたらと思っています。



江副 直樹 氏
ブンボ株式会社 代表



濱田 孝正 氏
合同会社フットパス
研究所 副代表



成崎 聡 氏
NPO 法人ひむか感動体験ワールド 事務局長



木村 邦彦 氏
鹿児島県観光連盟 係長

06 閉会

最後に、九州自然歩道フォーラム代表の野元尚巳氏より閉会のご挨拶。



九州自然歩道は、完成して40年経ち、時代背景も変わり、朽ち果てたり、忘れ去られている場所も現実としてあります。これを、これからいい形で発展させていければ、今ある他の自然歩道やこれからつくられる歩道の大きな参考になると思います。だからこそ九州自然歩道をなんとか維持しながらシンボリックな形で残していければ、さまざまな世界が変わってくるとと思っています。

ニューズペーパーの内容は一部を抜粋して作成しています。このシンポジウムは、YouTubeにて配信しております。
右のQRコードをお読み取りいただくか、「九州を歩こう」「歩く旅」がつくる持続可能な地域と観光」と検索してぜひご覧下さい。



お問い合わせ：九州自然歩道フォーラム事務局 mail: info@kntf.jp